バルザックの出発
書簡体小説『ステニー』について

佐野　栄一

三畳ほどの狭い私の書斎の壁に、コクトーの描いたバルザックの肖像の複製がある。肖像といっても、おそらくはコクトーの気紛れでナダールの写真をもとに一気に描き上げられたもののようだが、中太の線で特徴がよく捉えられている。私は概してコクトーの描いたものに興味はないが、この肖像にはひどく愛着を覚える。その目もとはどことなく悪戯っぽく、口には微笑を含んでいて、澄んだ目でこちらを見ている。しかし、目の焦点は曖昧で対象を見ているようには見えない。対象の背後にあるあるいは対象と自分との間の中空にある何か目には見えないものを見ているのではないか、と思わせる目なのである。この肖像のバルザックはそんな不思議なまなざしをしている。

肖像の下には、コクトーの筆跡で、「ペテン師たちの審判者にして犠牲者、だまされやの王、バルザック」と記されている。そう書いたコクトーの頭の中にどの様なバルザックの姿があったのかは分からない。しかし、しばしば金に窮して作品の空約束をし、原稿と借金に生涯追われ続けて数々の傑作をものにしながら、それをデュマやシューより安い印税で渡さなければならなかったバルザックには似つかわしい言葉に思える。ともあれ、われわれは、バルザックには気の毒であるが、文学の商売人たちや借金取りに感謝しなければならない。バルザックが自ら「観念の売春」と卑下してはいるが、彼の自立を可能にさせた最初の匿名での小説『ビラーグの跡取り娘』（一八二二年）は、文学の商売人たちが彼を仲間に誘ってくれたおかげである。また、彼がその後自分自身の本名をさげて、背水の陣で文学に回帰し、以後次々に傑作を生み出し続け得たのは、その間の事業に失敗し莫大な借金に追われ続けたからでもある。

しかし、『ステニー、あるいは哲学の誤謬』についてはいささか事情が異なっている。この書簡体小説は、バルザックが作家としてのスタートを切る前に習作として書かれ、半ば完成しながら放棄された。彼の習作の

中では質の上からも量の上からも最も大きな作品である。一八一九年八月四日、バルザックは両親の許可を得て、作家となりうる才能を証明するために一年間レスディギィエール街の屋根裏部屋に籠もった。彼が才能の証明のために選んだテーマは『クロムウェル』という韻文悲劇で、九月初め頃からこれに取りかかった。ところが、ほぼ同時期に、バルザックは『ステニー』も書き始めるのである。妹ロールに宛てた手紙によれば、バルザックは『クロムウェル』を書きあぐんで呻吟しているとき、気分転換にこれを書くのだという。（注１）だとすれば、『ステニー』の執筆は無償の純粋な動機を持っている。『クロムウェル』の執筆が、当時の文学の本道である韻文悲劇という分野で才能の証明を行う、という謂わば不純な動機を持つのに対し、『ステニー』は当時のバルザック自身が書きたいものとして書き始められた。しかも、『ステニー』に　は、この後まもなく売文稼業に入る彼に必要となる文学作品という商品を売るための商業的配慮もいらない。その意味で、この作品は若きバルザックの内的世界を演繹するための最も介雑物の少ない貴重な資料と言うことができる。

バルザックがかなり早くから哲学に興味を持っていたことは、しばしば彼の分身に擬せられる『あら皮』のラファエルや『ルイ・ランベール』のルイと話者の言葉からも、『人間喜劇』の読者には周知の事実であろう。実際、現在われわれに残されている最も早い時期のバルザックの手稿も哲学である。彼は一八一八年頃から『魂の不滅に関する試論』をはじめとする七篇の哲学試論ないしは覚書を書いた。また、同じ頃の他の様々なジャンルにわたる習作にも、概して哲学の影響は色濃い。彼が作家になろうとしたことと哲学に強い興味を抱いていたこととの間には、確かに緊密な関係のあったことがうかがわれるのである。しかし、われわれはそのことを、様々なバルザック研究からよくある事実の報告でも読むように安易に受け取っている可能性もある。若きバルザックにとって、哲学は、単に強い知的な興味の対象というだけだったのか。もしかすると、もっと感情

的な緊迫した探究だったかもしれない。

『ステニー』においても、哲学は主要なテーマであることは言うまでもない。何よりもそのことは「哲学の誤謬」という副題が示している。しかも、この作品には先に述べた哲学試論や覚書からそのまま論議を引き移している箇所がいくつも見られる。ところが、私の最も敬愛するバルザック研究の大家ベルナール・ギュイヨンは、『ステニー』において哲学は周辺のテーマにすぎず、本質的なのは結婚制度に関わる不倫の愛あるいは姦通のテーマであると述べている。ギュイヨンに従えば、『ステニー』は、物語としては当時よくある型の平凡な話でことに見るべきものはなく、哲学思想が展開されている点で重要であるとしても、その哲学思想とは唯物論的論議ではなく、むしろ社会制度に意義を唱え反抗するルソー的な哲学思想であると述べている。（注２）　また、やはり著名なバルザック学者であるルネ・ギーズとロラン・ショレは、当時バルザックが真剣に取り組んでいた哲学研究における彼の理解のレベルとその価値に関して、はっきりと疑問符を付している。彼等はまず、バルザックの指示を受けて彼の著作集の序文を起稿したフェリックス・ダヴァンの次の様な言葉を取り上げ、その誇大さを指摘する。「彼（若きバルザック）は古代や中世、また前の二世紀の哲学者や医学者等の著作を比較し、分析し、要約した。」（注３）　彼等によれば、バルザックは主に『百科全書』とベールの『歴史的批評的辞典』及びヴォルテールの『哲学辞典』をあちこちを読み噛ったにすぎず、原典に当たっているのは僅かにマルブランシュとデカルトだけであるという。しかも、それも正しく理解してはおらず、しばしば自分の求めるテーマに関係した論議の陳腐な要点を、かなり素朴に繰り返しているにすぎない、と言うのである。（注４）　とすれば、物語が平凡で哲学的価値にも乏しい『ステニー』は、一個の文学作品として見た場合、全く取るに足るものではない。もしこの作品に意味があるとすれば、後の諸々の傑作の源泉を探る資

料的価値としてであり、その観点から　『ステニー』の重要性は常に『人間喜劇』から測られなければならない。このような見方をすれば、ギュイヨンの指摘することは全く当を得ていると言ってよいのである。

しかしながら、われわれは、例えば、次の様な議論に与し得るだろうか。《バルザックは『人間喜劇』を一つの体系たらしめたいと思った／そのために著作を「風俗研究」・「哲学研究」・「分析的研究」とに分けた／この計画は余り成功せず、分類は『人間喜劇』の諸作品の価値にほとんど何の影響も与えていない／その意味で、『人間喜劇』の体系は取るに足りない》と。けだし、ここで忘れてならないことは、体系の持つ意味ではなく、バルザックが体系にこだわったことではあるまいか。体系化の意図が作品を味わうことに関してほとんど何の意味も提供しなかったとしても、バルザックという作家を理解するためには重要な意味を提供している。同じように、習作時代にバルザックが哲学にこだわったのは、単なる彼の興味を越えて、またその理解のレベルとは無縁に、彼にとって何かとても重大な動機や理由がそこにあったからなのではあるまいか。肝心なのはそのことなのではあるまいか。

『ステニー』に戻ろう。

『ステニー』の物語は、簡単に要約してしまえば、互いに熱愛する二人の男女が一方の望まぬ結婚によって間を引き裂かれ懊悩する話である。結婚は、一般に、当事者ばかりでなく当事者と深く利害や感情を共にする周囲の人間たちをも安定した幸福状態に置くことを目的としてなされる社会的制度だが、『ステニー』における結婚は、ステニーの夫プランクセーの財産的欲求を満たす以外、誰も幸福にしない。この結婚が成立したのは、事実上の決定権を握っていたステニーの母に重大な事実誤認があったからだが、自己の利益を図って事実誤認を誘導したのはプランクセーに他ならなかった。しかも、彼は、ステニーが自分の置かれた情況と彼女の

愛するジョブへの心情を赤裸々に告白してこの結婚を彼のほうから破棄してくれるように嘆願した手紙にも、全く心を動かされなかった。つまり、『ステニー』の結婚は社会制度が作り出しうる最悪の結婚の一つと言いうるだろう。一方、二人の恋愛のほうは、暴力的な酒呑みの夫のいる乳母の家で乳兄妹として育てられ、共に助け合い、かばい合い、信頼し合って暮らした幼少年期の思い出を源とし、長じては肉体的にも精神的にも人並み優れて美しく成長した二人が、突然の再会を果たすことから生じている。彼等が互いに懐かしい昔の姿や出来事を心に蔵して慕情を持ち続け、その慕情が不意の再会とそれに続く周囲の邪魔だてによって逆に大きな恋愛の炎に燃え上がるのは、ごく自然な心理の流れであった。この自然の流れは、当然次に、愛の成就を迫ってそれぞれに行動を求めることになる。社会的拘束がなければ、二人の愛は最も幸福な合一を果たすはずであった。しかし、その最良の幸福を誰も幸福にしない最悪の結婚が阻む。幸福をもたらすべき結婚制度が幸福になる権利を奪い、しかも幸福の追求を罪として指弾する。ジョブの友ヴァネールは言う、「もしステニーが結婚していなかったらなら、罪は存在しない。つまり、罪は結婚の事実に由来している」（注５）と。ギュイヨンの言う『ステニー』の本質的テーマはここにある。すなわち、社会制度はそれを構成するすべての者が平和と幸福を持続的に得るために存在し、それを支える最高のルールが美徳であるはずである。しかし、任意の社会制度が人にむしろ不幸をもたらすとき、人はこの社会制度が作った美徳に背き、社会制度を無視するあるいは破壊する権利を持ちうるか、ということである。

こうした問題は、言葉を「法」や「国」やあるいは「家族制度」に置き換えて、根本的には同一の多様な設定が可能であるから、いつの時代においても相変わらず興味深い問題となる。しかし、前世紀にルソーを持ち大革命を経たバルザックの十九世紀においては、もはや陳腐であった。歴史は、その大問題に「然り」と答え、

革命政府は制度の中心にあった王の首をはね、同時に反革命勢力が王政擁護の精神的拠り所とする宗教と美徳の絶対性を破壊するために、神を否定したのである。『ステニー』においても、ジョブは同様の手段に出る。彼は、まず、ヴァネールの説く思想とステニーの求めるものとの葛藤から自らを脱却せしめる。すなわち、彼は、これまで社会制度の正当性を否定するヴァネールの手紙と、美徳を盲目的に信じそれを支えとするステニーの心情を尊ぶことの間で葛藤してきたが、自分の心を前者に決定的に傾ける。ヴァネールは、社会の法の前にそれより優先されるべき自然の法があるといい、自然の法においては二人の愛は合法化されると言ってきた。さらに、愛に苦しんで死ぬことは社会の法に従ったとしても自然の法に背くことだといい、権力者にとって最も都合のいいこの社会の法は犯罪だと言ってきた。（注６）　もはや葛藤に耐えることのできないジョブは彼の言葉に合意する。そして、彼は、今度は積極的にステニーの愛を阻む美徳を破壊するために、神を否定するのである。彼は様々な唯物論から吸収した論理を駆使して、ステニーの立っている倫理的基盤がいかにばかげたものかを証明する。神を前面におしたてた人間の戦いの歴史を取り上げ、神の与える試練の問題を取り上げ、悪の問題を取り上げ、世界と神とのあるいは天地創造の問題を取り上げる。彼は、それら神の実在を前提とした事柄の結果がどれほど不条理かを示し、宗教の想定する人格神としての神が解決しがたい矛盾に満ちていることを明らかにする。そこから彼は神を否定し、美徳を否定し、今を耐え忍んで来世に二人の愛の成就などありえないことを述べるのである。こうして、『ステニー』においては、哲学が物語の山場に重要な機能を果たしている。

しかし、哲学の役割は物語展開におけるこの謂わばてことしての働きにすぎないのだろうか？　小説の冒頭には非常に長い哲学論議がある。ジョブの見た夢の意味をきっかけに、ヴァネールは人間の意識に関して徹底

して機械論的感覚論を展開し、ジョブの方はしばしば神秘主義的な論議を展開する。これ等二人の数頁にもわたる哲学論議は、結果的に見れば、ここでの魂の不滅に関わる論議が後の神の問題へ、美徳の問題へと結び付いて、物語の展開に関与すると言いうるのだが、論理をここまで遡るのは、単にステニーの美徳を否定するためとするには、あまりに煩瑣な枝葉末節となっていると言わなければならない。勿論、われわれは、しばしばバルザックが延々と衒学的な逸脱を行うことを知っているし、この作品がまだ技術的な鍛練の途上にある習作であることも分かっている。しかし、ジョブが兄とも師とも敬愛するヴァネールが、彼の直接に間接に提出する問題に対して、繰り返し繰り返し否定を重ねるのを見るとき、私にはあのニーチェの白昼にランプを点して「神は死んだ」とふれ回る狂人の姿が連想される。目の前にぽっかり開いてしまった虚無の深い穴に、ヴァネールは、魂の不滅も愛も神も社会も美徳もあらゆるものをかたっぱしから投げ入れて、何一つとして穴から這い上がってこないのを悲しく眺めたのだ。このヴァネールこそは、いつかのバルザックだったのではないだろうか。彼が当時書き綴った様々な哲学試論や覚書に繰り返される中心的なテーマは、魂の非不滅性ということであった。バルザックは、おそらく、魂の不滅を否定する様々な唯物論の論拠を見い出しては自分の思索の中で変形し、そのたびに「やはり神は死んだ」と確認しながら書き綴ったのだ。神が死ぬことは、言うまでもなく、ヨーロッパの伝統的価値観が根底から崩壊することであり、そこで生きてきた人間が自分の過去と未来の行動の精神的保証を失うことである。そうしたことは既に、十八世紀の啓蒙哲学者たちや革命精神に殉じた人々において経験されたことであったかもしれない。また、バルザックの父ベルナールその人や、たとえばナカール医師のように、バルザック家と親しい人々の中にも無神論者であった人はいたであろう。だが、単なる神に対する無関心や疑いではなく、明確な神の死としての虚無を知ることは、初めてそれを意識した一個の人間に

おいて、精神の危機であり、革新であり、新たな出発にほかならないのである。

だから、バルザックはヴァネールから出発したのだ。そして、おそらく、今ジョブに至ったのである。

ヴァネールは虚無を手にし、あらゆる事象を唯物論的機械論によって解釈した。社会制度の成立も人間の力による関係、すなわち権力という側面から解釈し、美徳を支配権力の巧妙な欺瞞として告発した。彼は愛も信じず、女を愛すことができない。彼にとっては、愛も単なる精神と肉体の作用なのである。愛の幻想は老いさらばえれば枯渇し、愛の欲望は充足されれば消滅し、高揚した心による愛の嵐は諸々の情況が重なって作り出す現象に他ならない。それゆえヴァネールは、ジョブが抑えがたい情念のために心身を消耗させ衰弱してゆくのを見ると、パリに戻り再び哲学的思索に入って気持を切り換えるように勧める。彼の哲学的思索では、ジョブを含め人間は、他の女で膨張した欲望を解消し、求めていた愛の充足感をそこで得ることも可能なのである。

このヴァネールの哲学に対して、ジョブは一度も正面からは反論しない。ヴァネールの教える虚無は、確かに真実なのである。ジョブにとっても、結局魂は不滅ではなく、人が神と呼ぶ神はどこにも存在せず、美徳は人間がこしらえたものにすぎない。しかし、世界は、ジョブにとって、ヴァネールとはどこかが違うのだ。世界には何かが満ちている。あらゆるものに何かわからぬものがあって、それが互いに何らかの影響を及ぼし合っている。ジョブにとっては、世界にはヴァネールの唯物論的機械論では納得しきれないものがあるのだ。例えば、ジョブは夢を「内的視象」と言い、それを「束の間の画面に未来も過去も無限も描かれる、また物の形で様々な観念がそこに描かれている軽やかな煙」と喩える。（注７）　ジョブの夢は彼の言う「受ける実体と与える実体」という論理的な枠組みで捉えられるような性質のものではない。また、ヴァネールにとっては、人間は感じる感じないを自由にすることはできず、従って感覚から派生する諸観念も自由にすることはできず、

要するに、人間に自由はない。極論すれば、ヴァネールの見るところ、人間は環境によってその筋道が機械的に決定されているのである。一方、ジョブにはそうではない。彼の意識はしばしば感覚も観念も自由に超越する。彼は言う、「ぼくは瞬時に間隙を飛び越してしまいます。あるものに気がつくと、その終わりが見えます。推論が始められると、その帰結が見えます。ある原理が感じられると、他の人間が証明の中でさまよっているときに、ぼくにはその原理が証明されます。そして、ぼくは、それを補う天分のない者には大変に強力な中間に介在するあらゆる観念に煩わされることなく、原理と推論と物とを適用します」（注８）と。さらに、彼は意識や感覚の不思議な働きについて次の様に言う。「彼女（ステニー）からは人間的なものを越えた何かが発散しています。この理解し得ない流体は、彼女の目から出るのか、身体から出るのか、どこでもあなたの好きなところに位置付けてもらっていいのですが、ぼくの存在すべてを変えるのです」。（注９）　しかも、ジョブには、この「流体」の影響によって高揚する自分の魂が彼女の魂と一つになったとき、永遠が生まれうると予感される。愛が合一するとき、「そこには自然のすべてが含まれているのです」（注10）　とジョブは言うのである。

私には、率直に言って、バルザックの神秘主義的表現の中に、いつになっても相変わらず未知な知り得ない領域が残っている。天才の想像力には凡人に測りがたいものがある。ただ、私には、バルザックが、意識には何らかの特殊な力があると感じていること、また想像力が大きく拡がり感情が膨れ上がるこの意識の大規模な流れこそ人間の持つ最も崇高な特性であると信じていることは了解しうるのである。それは換言すれば、知的領域における「スペシアリテ（透視力）」と呼ばれるバルザック的直観であり、感情的領域における強烈な欲望、すなわち情熱である。

神が死に、自分を取り巻いていた価値観が根底から瓦解したとき、人は一切の責任を自らが引き受けて自分自身の価値観を再構築しなければならない。バルザックは、そうしたとき、人間のこの特性を価値の中心に置いたように、私には思われる。バルザックはそれをジョブに反映させた。ヴァネールがバルザックの分身であったように、ジョブは新たなバルザックの分身なのである。それゆえにジョブは揺れ動く。彼は社会制度を守って美徳に踏みとどまろうとし、ステニーに対する自己の膨れ上がる欲望を死に至ろうとするほどまでに抑圧する。というのも、情熱は極めて社会的な産物だからである。ジョブは二人の愛の成就のためには社会を否定しなければならないが、同時に、この人間における崇高なるもののためには社会を容認しなければならない。彼の前に立ちはだかる社会的障害は、情熱にとってはそのエネルギーの製造装置であり、充填装置であり、加速装置だからである。ヴァネールの弟子であるジョブには、ステニーが苦しみながらたてこもる美徳の城砦を、いつでも根底からつき崩すことができたはずである。ステニーは既に、ジョブが最終的に彼女をわがものとするため美徳を否定する例の手紙を書く以前に、「私は、傷ひとつないこの美徳、私の最良のものであり、私のただひとつの魅力であるものを守ることについて、自分よりもむしろあなたに依頼しています」（注11）と言っている。彼女は言葉どおりそう言っているのである。ステニーは、おそらくジョブが真に望めば、いつでも彼のものとなったのだ。しかし、彼は、抑えることによって一層激しくなる情熱をひたすら身に蔵し続けることの美しさを無意識のうちに歓び、あたかも自虐によって陶酔を得る倒錯者のように、あるいは苦痛に耐えることを何よりの信仰のあかしとする殉教者のように、死ぬほどの苦悩の中で崇高なものを感じ、それを受容していたのだ。また、ステニーの方も、この大きな苦悩を耐え忍ぶことが、彼女自ら言うように彼女の「最良のもの」を「ただひとつの魅力」を作り、守ることだ、と信じていたのである。（注12）

私は、バルザックの文学の出発点には虚無があったと思う。この虚無が哲学からやってきたのか別のところからやってきたのか、それは知らない。しかし、彼は、おそらく、不意に舞込んできた信じがたい神の死亡の報を、様々な哲学書を渉猟することで幾度も幾度も確認したのだ。やがて確認の末に、もはや自分には頼るものも拘束するものもなくなったことが分かって、ひどく重い自由を手にした。こうして彼は社会をありのままに見たのだ。あるいは手垢のついた世界を全く新たに自分の目で見直したのだ。そうしながら、彼は自分の知性と感性と感情とによって彼にとっての世界を再構築し始めたのである。バルザックは極めて豊かな想像力をもっていた。それゆえ、唯物論的機械論はその精神の性格に合わなかった。彼には、ヴァネールのように、世界を静的な冷たいものとして捉えることができなかった。逆に、世界は絶えず変化するひどく熱いものと感じた。そして、最も世界を熱くさせる情熱をかけがえのないものと感じ、その根本に流体をあるいはエネルギーを想定し、その実体が世界のすべてに行きわたり、すべてはそこから生まれそこに戻る、と壮大な想像力をはばたかせて考えた。そこに彼の新たな哲学が生まれたのである。

バルザックの特異な哲学の要点は、敢えて私の拙い比喩を用いて言えば、こんなふうに言いうるかもしれない。人があるものとあるものとを「赤い」と言うとき、人は暗黙のうちにその個別的な差異を排除しなければならない。「赤」は無限に存在し、同時にどこにも存在しないからである。だとすれば、赤や青を示す「色」というものは益々あらゆるところにあり、あらゆるところにない。こうして高次な言葉ほど明確な実体はない。しかし、そこには、ある一貫した原理が働いている。この原理は意識の根本から言葉を超越した直観的意識に至るまで貫き通っている。しかも、第一次の意識は、何かに対する意識であるから原理は対象のほうからもやって来ている。だから自らを含め無限に異なる存在には共通する何かがあり、それらは高次な段階へ進むにつ

れて互いに統合してひとつになってゆく。バルザックはこう想定し、この何かを原理と一体をなす実体として捉えているように、私には思われる。すべての根源にあってまたすべての果てにある、しかしどこにも存在しないこの実体、私の狭い部屋の壁にかかるコクトーの肖像のバルザックは、それを見ているような気がするのだ。

注

1 Correspondance tome 1 , Garnier, p.37.

2 Bernard Guyon : Pensｅe politique et sociale de Balzac, Armand Colin 1947, p.101 ～ 104.

3 Plｉade tome 10, p.1203.

4 Renｅ Guise et Roland Cholet : Introduction aux Premiers Essais, Plｉade, Œuvres diverses de Balzac tome 1, p.1388.

5 Plｉade, Ｅuvres diverses de Balzac tome 1, p.808

6　同書　p.803 ～ 810

7　同書　p.721.

8　同書　p.727.

9　同書　p.747.

10　同書　p.747.

11　同書　p.825.

12　物語では、ステニーが互いに睦み合う最後の段階で「ジョブ、だめ、だめ」という　言葉を発している。彼はそれを彼女の拒絶と受けとめ、一挙に陶酔から覚めて羞恥と　屈辱を感じ、以後彼は愛の成就の努力を決定的に放棄することになる。しかし、ステ　ニーの側から同一の情況を説明した彼女のラドティ夫人宛の手紙では、ステニーはそ　のとき完全な陶酔状態の中にいて、自らの発した言葉さえ分かっていないことが分か　る。つまり、彼女は拒絶したのではなかった。かりに彼女にかけらほどの美徳への最　後のこだわりが残っていたり、あるいは本能的な羞恥からかすかな拒絶の意図があっ　たとしても、それを明確に拒絶としたのは彼女ではなく彼である。要するに、美徳に　終始こだわり続けたのはジョブの方なのである。

◎　『ステニー』の梗概

主人公の青年ジョブは、パリで共に哲学を探究した畏友ヴァネールと別れて、幼少年期を過ごしたトゥーレーヌへの旅に発つ。トゥールに宿をとった彼は、思い立って乳母を訪ねるが、彼女は既にこの世になかった。仕方なく彼は、一人記憶を頼りに昔の場所を巡り歩き、思いがけず幼い日の遊び場までやって来る。すると不意に、一緒に育てられた乳兄妹ステニーとの様々な出来事が奔流となって鮮やかに蘇ってくる。甘美な思い出にひたって心満たされたジョブは、陽が傾くのを見て帰途につく。途中、彼は川べりで舟から降りた二人の婦人と出会うが、その一人がステニーであることに気づかない。成長した彼女と行き違おうとするとき、突然悲鳴が聞こえ、舟が転覆して二人の男が溺れているのが目撃される。救助に飛び込むその刹那、ジョブは彼女がステニーであることに急に気が付く。懐かしい彼女の目の前で彼女のいとこの二人をなんとか救助したジョブは、自らも力つきて気を失う。しかも、ひどい熱を発して病臥し、容易に回復しない。その間、ジョブは最初にかつぎこまれた家から粗末な漁師の小屋に移されている。驚き、憤りながら、彼は、秘密は自分とステニーとの関係にあると推測する。隠されたステニーに、彼の想いは日々つのってゆく。一方、ジョブと会うことを母に禁じられたステニーも同様だった。こうして、ある日、ついに耐えきれなくなったジョブは、衰弱した身体に杖をつき、老人の姿格好で、街にステニーを探しに出かける。彼の激しい情熱と幸運とのおかげで、ようやくステニーは見い出される。しかし、彼女は母と一緒であるために、彼には言葉を交わすことも近寄ることもできない。ジョブはただ彼女をじっと見続ける。けれども、同じように恋をしているステニーには、厚い大

きなマントをとおしてジョブの身体が見え、まぶかに被った帽子と立てた襟に隠れた彼の顔が見え、まなざしに込められた彼の熱い気持が感じ取られる。この再会によって彼等の想いはますますつのり、互いに宿命的な結び付きを予感する。しかし、ステニーは既に結婚が決まっていた。懊悩する彼女は、この結婚を破棄してくれる様、相手のプランクセーに懇請する。だが、ステニーの財産によって代議士になる計画の彼は耳を貸さない。こうして二人の結婚式が予定どおり挙行されることになる。病から癒えてようやく体力の回復したジョブは、何も知らず希望に胸を膨らませて、まさに結婚のその日、着飾って彼女の家を訪れる。ドアを開け、ステニーの婚礼衣装を不意に見た彼は、奈落の底に突き落とされる。その絶望はあまりに深く、やがてジョブはカタレプシー状態に陥る。日々徐々に衰弱する彼を見て、召使のニヴァルは最後の手段としてステニーの母に彼女を彼の許に寄越してくれるよう嘆願する。ジョブを見て涙に濡れるステニーは、その手や頬に接吻する。そのおかげで、まだなお錯乱しながらも、彼は徐々に現実の意識を取り戻し、奇蹟的に精神の病から立直る。こうして、ジョブは彼女を再び見、触れることによって、死に向かう生から、苦悩に満ちた歓びを得る生への転換を図ろうとする。社交界で完璧に振る舞い人々の賛嘆の的となる彼と感情を抑えて美徳の化身となる彼女、二人はしばらくこの苦しみに満ちた幸福を保つ。しかし、ジョブには愛の成就を求めて膨み続ける感情を抑えきることができなくなる。彼は叶えられない愛の苦しみよりはむしろ死を求め、再び徐々に衰弱してゆく。ついに彼は、もはや会うことは歓びではなく苦しみであり、自分はすすんで死に向かう旨の訣別の手紙をステニーにしたためる。しかし、ステニーにとっても事情は同様であり、生きることは結婚以来苦痛でしかない。ただ、彼女は自分を取るに足らない存在と思い、非の打ちどころのないジョブを惹き付け人々を惹き付けるうる唯一の自分の美質は、ひたすら悲しみを押し殺して美徳に殉じる姿そのものだと考え、苦しみを受容している。

しかし、もしジョブがいなくなれば、その美徳は生のあまりに重い荷物でしかなくなる。だから、彼女は、結局ジョブが蘇生し、彼が一転してもはや生の歓びを自分に禁じることはできないと彼女の美徳を否定する手紙を書いてきたとき、甘んじて美徳を棄て、彼の意志を受け入れようとする。ジョブはステニーを迎えに行く。ついに彼等は二人だけで懐かしいサン＝シールの田園を歩み、ジョブの家に着く。もはや心の軛を解いた二人は互いの愛の歓びと悦楽に身を委ねるばかりである。しかし、最後の段階に至って、ステニーの口からは不意に「ジョブ、だめ、だめ」という恐れの言葉が漏れる。彼は冷水を浴びたように陶酔から覚め、激しい羞恥と屈辱を感じる。ステニーにはついに二人の愛の成就を受け入れることができなかったと判断した彼は、彼女の前から姿を消すことを決意する。しかし、街では既に二人だけの姿を見た人々が彼等の関係を大げさに噂している。ステニーの夫プランクセーは、貴族としての矜持から、また選挙に立候補する野心から、街の噂の屈辱に甘んじることはできない。彼は出発前のジョブに決闘を申し込む。ジョブにとって相手は憎悪の対象であり、今や生きる希望も失った彼は、この決闘を暗い喜びをもって承諾する。そして・・・

この物語はここで中断する。しかし、物語運びを見ると、自ずから、冒頭で語られたジョブの夢が結末において実現されると予測される。すなわち、ジョブは決闘でプランクセーに殺され、冷たくなった彼をステニーが絶望のうちに抱きかかえる。こうして悲劇の幕が降ろされる。